

聖書日課 『からし種』 2019.10.27-11.3

<p><b>27日</b> <b>(日)</b></p> <p>ヨシュア記 6章</p>	<p>「あなたたち兵士は皆、町の周りを回り…それを六日間続けなさい。…七日目には、町を七周し、祭司たちは角笛を吹き鳴らしなさい」(3、4節)。エリコの堅固な城壁は、武力ではなく、神への信仰の力によって崩された。「神が必要とされるならば必ず与えられる」との信仰に立つと共に、自分が力を尽くすべきことと、神に委ねるべきことを見極める知恵を求めたい。</p>
<p><b>28日</b> <b>(月)</b></p> <p>ヨシュア記 7章</p>	<p>「その場所の名はアコルの谷と呼ばれ、今日に至っている」(26節)。戦争略奪品で「私腹を肥やすな」という戒めを破ったアカンが処刑された場所は「アコル(災い)の谷」と呼ばれた。しかし預言者ホセアは「アコルの谷」を「望みの門」に変えたもう主の慈しみを語る(ホセア2:17)。旧約の戒めでは生きられない私たちのために来てくださった主イエスの愛を覚えて</p>
<p><b>29日</b> <b>(火)</b></p> <p>ヨシュア記 8章</p>	<p>「ヨシュアは、モーセが命じたことをひと言残さず、イスラエルの全会衆、女、子供、彼らの間で生活する寄留者の前で読み上げた」(35節)。当時は「聖書」のような書物はなく、ヨシュアが読み上げるモーセの言葉を一言もさらず聴くことによって、人々は神の語りかけ／神の御心を受け止めていった。今日、私たちはどれだけ真剣に「聖書」に聴いているだろうか。</p>
<p><b>30日</b> <b>(水)</b></p> <p>ヨシュア記 9章</p>	<p>「我々のなすべきことはこうである。彼らを生かしておこう。彼らに誓った誓いのゆえに、御怒りが我々に下ることはないだろう」(20節)。戦いを回避し、無益な犠牲者を生み出さない知恵を尽くしたギブオンの指導者たちの「勇氣」を思う。彼らは周囲から「勇士」(10・2)と恐れられた存在だったが、あえて服従を選んだのだ。真の「勇氣」とは何かを考えさせられる。</p>

聖書日課 『からし種』 2019.10.27-11.3

<p><b>31日</b> <b>(木)</b></p> <p>ヨシュア記 10章</p>	<p>「ヨシュアがただ一回の出撃で…すべての王を捕えることができたのは、イスラエルの神、主がイスラエルのために戦われたからである。」(42節)。神ご自身が戦ってくださるのでなければ、私たちは何もできない。ただし新約を生きる私たちの戦いは十字架に向かう主イエスに従う歩みのこと。私たちの一歩先を戦い歩まれる主イエスの背中を見失わないように。</p>
<p><b>11月1日</b> <b>(金)</b></p> <p>ヨシュア記 11章</p>	<p>「主はモーセに命じたとおりに、彼らを滅ぼし去られた」(20節)、「この地方の戦いは、こうして終わった」(23節)。ヨシュア記6章から11章にいたるカナン征服の記述は、現在のパレスチナ問題におけるイスラエルの自己絶対化の姿勢と重なり、正直なところ読むのが辛い。「戦いはこうして終わった」とすべての人びとが安心して言える日が来ることを祈って。</p>
<p><b>2日</b> <b>(土)</b></p> <p>ヨシュア記 12章</p>	<p>「ヨシュアの率いるイスラエルの人々がヨルダン川のこちら側、すなわち西側で征服した国の王は次のとおりである」(7節)。イスラエルが征服した国の王たちのリストは、征服された人々にとっては屈辱と悲しみであったはず。そのようなリストではなく、キリストの平和に膝をかがめ、ひれ伏す者たちのリストが今日、神の前に一人でも多く刻まれていくことを祈り願う。</p>
<p><b>3日</b> <b>(日)</b></p> <p>ヨシュア記 13章</p>	<p>「主の約束されたとおりに、彼らの嗣業はイスラエルの神、主御自身である」(33節)。主が与えて下さる嗣業には多くの命の犠牲があったと聖書は記録している。滅ぼされ、追い出された民もいたが、ゲシュル人、マアカ人のようにイスラエルと共に生きる道を主が備えてくれた民がいた。私たちに与えられている恵みの嗣業とは何だろうか。</p>